珈琲ダイアリー

第２話『作家と殺し屋』

脚本・海山純平

登場人物

・風見仁

・彼岸花琴子

・寺田幸平

〇都内・住宅街広場・昼

キッチンカーのカウンターに丸椅子を並べて営業準備をしている仁。

車内でお湯を沸かしたり豆を並べる。

仁「さ～てと、後はお客さんを待つとしますかあ」

車内の椅子に座って読書を始める。

仁M「お客さんが来るまでの暇潰しはこれ、読書だ。昔から読書家だったわけではないが、気まぐれで買った本が面白く、見事にドハマりときた」

琴子（声）「すみませ～ん」

仁「はいはい。いらっしゃい」

妖艶な雰囲気の女性・彼岸花琴子が立っている。

琴子「ブレンドコーヒーを頼むよ」

仁「はいよ。どうぞ座ってお待ちを」

慣れた動作で珈琲を淹れる仁。

その様子を見ながら、傍に置いてある本に視線をやる琴子。

琴子「おや、その本は……」

仁「ああ、暇潰しに読んでいましてね。殺し屋が主人公なんですが、意外と面白いんで

すよ。すっかりハマっちゃって」
琴子「そうかいそうかい。楽しんでもらえて嬉しいよ。書いた甲斐があるというものだ」
仁「へ？書いた？」
琴子「あ、しまった。まあ隠す事でもないか。どうも初めまして。その本の作者です」

本と琴子を慌てて交互に見やる仁。

仁「え、まさか……彼岸花琴子、先生で？」
琴子「そのまさかだよ。私は彼岸花琴子。まさか読者に会えるとはねえ。おまけに気に入ってもらえたときた」
仁「えええええ！！？」

○同・数分後

優雅に珈琲を飲む琴子。
目を見開いたままの仁。

琴子「うん、なかなか美味しいじゃないか」

仁「それは、どうも。いやしかし、作者本人に会えるなんて……驚いたわあ」

琴子「こっちもだよ。散歩がてら見慣れないお店があったので立ち寄ってみたら、読者がいたんだ。お買い上げありがとうございます」

仁「いえいえこちらこそ、素敵な本を…ん？散歩がてら、てこの辺にお住まいですか？」

琴子「あそこにマンションがあるだろ？」

広場近くに建つマンションを指さす琴子。高層ではないがレンガ調の綺麗なマンション。

琴子「あそこに住んでるよ」

仁「へえ～…て、住んでる所ばらしちゃダメでしょ！？」

琴子「大丈夫さ。どの部屋に住んでるかバレなければいいさ」

仁M「確かに。仮に郵便受けを見ても、彼岸

花が本名であるとは限らないか。なら部屋がバレる事は無いか」

琴子「あでも、郵便受け見られたら終わりか。本名で仕事してるから」

仁「セキュリティがばがばじゃないすか！」

琴子「まあ、君が犯罪に手を染めるようには見えないし、大丈夫だと思うけど」

仁「しませんよ。とはいえ、今後は用心して下さいよ？」

琴子「はいはい～」

その様子を近くのベンチに座りながら盗み見る男・寺田幸平

○同・翌日・昼

キッチンカーで読書している仁。

幸平が来店する。

幸平「すみません。ブレンドコーヒーをください」

仁「いらっしゃい。少々お待ちを」

珈琲を淹れる仁。

座りながら琴子のマンションを凝視する幸平。

仁「あのマンションがどうかしましたか？」

幸平「いえ、別に」

仁「昨日はあそこのベンチに座って、こっち見てたでしょ？失礼ですが、どちら様で？」

幸平「気付いてたんですか！？」

仁「まあね。で、どちら様？」

幸平「（咳払い）私、出版社の者でして」

仁「出版社の人？」

幸平「彼岸花琴子の担当編集をしております。寺田幸平と申します」

仁「え！今度は担当の人！？どうなってんだよ……えっと、寺田さんでしたっけ？出版社に居なくていいんですか？」

幸平「ええ。ちょっと事情がありまして……」

仁「締め切りがヤバイから見に来た？」
幸平「違います」
仁「生存確認？」
幸平「違います」
仁「実はストーカー？」
幸平「違います」
仁「担当のフリしたストーカー？」
幸平「違います！どんだけストーカーにしたいんですか！私はですね、彼岸花先生の身の安全を確認をしに来たのです！」
仁「身の安全を？護衛ってことですか？」
幸平「そう」
仁「担当と護衛のフリしたストカー？」
幸平「だから違いますって！先生はですね、今狙われているんですよ」
仁「狙ってるな」
幸平「私じゃない！謎の人物から、命を、狙われてるんです！」
仁「命を？どういう事です？」
幸平「無関係の方には知られたくないのです

が……実は先日、こんなのが」

鞄から紙を取り出し、仁に見せる。

仁『『彼岸花琴子へ。今すぐ小説を書くのをやめろ。もしくは別のジャンルの作品を書け。でないと殺す。これは脅しではない、本気だ』。脅迫文……だよな」

幸平「それが先生の郵便受けに入っていたそうです。悪戯かとも思いましたが……」

仁「警察には？」

幸平「相談はしました。しかし万が一の事があってはと思うと、居ても立っても居られず、こうして様子を見に来たのです」

仁「なるほど。よし、なら俺も協力しますよ」

幸平「え、きょ、協力？」

仁「しばらくの間はここで店を構えているので、朝から夕方までの様子見くらいならできるんで」

幸平「し、しかし無関係な方を巻き込む訳に

は……」

仁「心配なく。これでも格闘技経験者なんで、いざという時は犯人をボコれますから！」

幸平「いやしかし……」

仁「さて、ちょっとシャドートレーニングでもするか！」

幸平「（溜息）」

○都内・アパート・夕方

幸平が帰宅する。

薄暗く散らかった部屋。

幸平M「まさかあんな所にキッチンカーがあるとは。おまけに店主に覚えられていたなんて……地味さには自信があったのだがな」

その中から本を一冊拾い上げる。彼岸花琴子の作品。

幸平M「俺は寺田幸平。職業は本物の殺し屋

である。担当編集兼護衛なんて嘘だ。あの辺をうろついていたのは、ターゲットである彼岸花琴子の身辺調査の為だ。何故、彼女を狙うかと言うと……」

険しい顔でページをめくる。

幸平M「彼女が書いた小説。主人公が殺し屋なのだが……手口が、殆ど俺と同じじゃないか！」

ページをめくる手が早くなる。

幸平M「殺し屋と言うと、美男美女がライフルでターゲットを殺すイメージだが、実際はそうではない。俺みたいな見た目が冴えない男が、ホームセンター等で買える物で殺す。そんなものだ。それなのに……」

本を閉じる。

幸平「ここまで類似しているとは……！」
幸平M「俺を知っているのか、それとも偶然か。どちらにせよ、不安要素でしかない。去年から彼女に何度も脅迫文を送った。なのに執筆をやめず続編を出している」

本を放り投げる。

幸平「不本意だろうが、死んでもらおう。不安要素は無いに越したことはない」

○数日後・住宅街広場・昼

仁の店に琴子が来店。

琴子「やあやあ、また来たよ～。まだここで営業していたんだねえ」
仁「彼岸花先生？！」
琴子「琴子でいいよ。堅苦しい」
仁「琴子先生」

琴子「う～ん、まだ堅いけどいいか」
仁「あなた軽々と外を出歩いていいんです
か！大丈夫です？」
琴子「？何をそんなに焦ってるんだい？」
仁「（声潜め）脅迫文。あなた命狙われてるん
でしょ？」
琴子「どうしてそれを？確かに脅迫文は去年
から沢山届いてるけど」
仁「あなたの担当編集さんが気にしてました
よ？この辺うろついて、あなたの安否を確
認してましたぜ？」
琴子「あの放任主義マンが？へえ、そうだっ
たんだ」
仁「どんなあだ名だよ……。ともかく、家に
いた方がいいんじゃ……」
琴子「冗談じゃない。作家はデスクワークが
殆どだよ？たまには散歩してリフレッシュ
しなきゃだ」
仁「だからって、一人で出歩くのはさすがに
危ないでしょ。命の危機でしょ？」

琴子「だからなに？」
仁「へ？」

カウンターに前のめりになる琴子。目が輝いている。

琴子「「命を狙われる」？いいじゃないか面白い！まさに漫画や小説みたいな出来事だろ？これで相手が殺し屋だったら尚更さ。是非インタビューさせて欲しいよ」
仁M「まじかよ！ビビるどころか喜んでるよ、この人？！」
仁「あ、あの～恐くないんすか？」
琴子「ん？あそっか、普通は恐怖を感じる場面か。いやはや、好奇心が爆上がりして恐がるのを忘れていたよ」
仁M「ダメだこの人……スリルを味わいたいを通り越してる。こりゃ担当さん骨が折れるぜ。ご苦労様、寺田さん。あれ？」

辺りを見回す仁。

仁M「そういや、この前会って以来、見掛けないな。護衛しなくていいのか？」

琴子「ところでこのお店は、あと何日間ここで営業してるんだい？」

仁「あと五日間ほどは。その後はまたどこかに旅に出ます」

琴子「旅？君は珈琲を販売して旅をしているのかな？」

仁「珈琲を販売はただの日銭稼ぎですよ。目的は別にありまして」

琴子「ほほう。目的とは？」

仁「「夢探し」です。胸が熱くなるような、夢中になれるようなモノを探してるんです」

琴子「へえ……若いねえ」

仁「琴子先生もまだお若いでしょ」

カウンターに代金を置いて席を立つ琴子。

琴子「さて、そろそろ執筆作業にもどらなきゃ、だ。……ここって夜までやってる？」
仁「いえ、夕方までですが」
琴子「それは残念。夜食の買い出しのついでに一杯頂こうと思ったのだけど」
仁「買い出し…え、夜出歩いてるんすか？」
琴子「そうだけど？料理が面倒なので買い物に行ってるよ？」
仁「夜道にも気を付けて下さいね！というか、危機管理を持ちましょうね！」

頭を抱える仁。
呑気に笑う琴子。

○同・夜
広場をうろつく幸平。
周囲を見回す。

幸平M「あのキッチンカーは無し。夜営業は

無いようだ。そして……」

夜道を一人、ビニール袋を提げて歩いている琴子。

マンションに入る。

幸平M「多少の誤差はあれど、大体この時間帯にターゲットは夜食の買い出しから帰宅する。よし、行動パターンが読めて来た。後は実行するのみだ」

○同・翌日・昼

キッチンカーの横でスクワットをしている仁。

琴子が来店。いつも通りに見えるが、足取りがやや覚束ない。

仁「あ、琴子先生。いらっしゃい」

琴子「やあ…また来たよ。ブレンドを」

仁「はいよ」

車に入り、珈琲を淹れる。
ボーっとしている琴子。

仁「なんか、疲れてます？」
琴子「ちょっと、連日の徹夜がさすがに響いてきたかなあ。締め切りが近くて、休む時間があまり無くてね」
仁「あれま、作家の方も難儀なことで」
琴子「ところで、さっきスクワットしていたねえ。筋トレ好きかい？」
仁「いえ、ここ最近体が鈍り掛けているので、隙間時間に軽く運動を」
琴子「そうかい。私も一段落したら、久々に運動といこうかな」
仁「何かされてたんですか？」
琴子「ボルダリング」
仁「ほお。結構ハードなのを」
琴子「やっていたかな？」
仁「なぜ疑問系？！」

やや離れた木陰ら様子
覗く幸平。

○同・数日後・夜
買い出しから帰宅する琴子。夜道なのに一人だ。
バレないように後を追う幸平。

○マンション前
辺りに人気は無い。相変わらず無警戒そうな琴子。
静かに、素早く距離を詰める幸平。懐からナイフを取り出す。

幸平M「あと少し、あと少しだ。もうすぐ不安要素が消える！」
琴子「（鼻歌）」
幸平M「後ろから密着して、抵抗を出来なくする。口も押える。そして喉元を一瞬で切

る。シンプルかつ迅速に」

姿勢を低くし、駆け出そうとする幸平。
すると建物の陰から唐突に現れ、幸平
にタックルする仁。
見事に不意を突かれ、倒れる幸平。

幸平「な！お前は……なんで！？」
仁「あれま！あんた担当の……。まあ、あん
たも、怪しいとは思ってたいたし」
幸平「怪しい？どうしてだ」
仁「一つ、護衛のわりには全然守ってる様子
がない。二つ、お前最近、ウチの店を離れ
た所から様子見してたろ？」
幸平「様子見を！気付いてたのか？！」
仁「まあな。んで、確定的な三つ、お前、出
版社の人じゃない。電話で出版社に聞いて
みたら「そんな者ウチには働いていません」
と答えがきた」
幸平「ちっ！」

仁「諦めな。動機は知らないが、もう失敗したも同然だ。これを期に、琴子先生には一切関わるな」

琴子「おやおや。物音がしたかと思ったら物騒な事態だねえ」

仁「ちょっと、琴子先生？！あなた一番ここに来ちゃいけない人ですよ！？」

琴子「いやあ、ネタになればと思って」

仁「身の安全最優先で！！」

幸平「ふふふ。丁度いい。失敗だと？まだだ。珈琲屋の店主、まずお前を殺して次にそこの作家を殺す！少し手間が増えただけだ」

仁を刺そうと迫る幸平。

派手でトリッキーな蹴りをする仁。連続で続ける。

苦戦する幸平。

幸平「ぐっ！何だそれは……タイミングが狂うな」

仁「知らない？エクストリームマーシャルアーツって言うんだけど」
琴子「おお～。よく分からないけどカッコいいねえ。どこで習得したんだい？」
仁「旅をしていると、色んなモノと巡り合えるんですよ。これも偶々、その使い手と出会ったついでに習いました」
琴子「面白い旅のようだねえ」
幸平「このおお・・・・！」

再び仁に切り掛かるが、トリッキーな蹴りに翻弄され、攻撃を受けまくる幸平。
感嘆する琴子。

琴子「ふ～む。これは何かのネタに…しまった！動画を撮るべきだったかな」
仁「いや、出来れば家に避難して欲しかったんですけど！？」
琴子「最近スクワットをしていたのはコレの

為だったのかい？」
仁「そうですよっと！」

後ろ回し蹴りを喰らわせる仁。

琴子「相手はナイフを持ってるけど、恐くないのかい？」
仁「あれ？これ、インタビューされてる？（琴子に）恐いですって！でも、ナイフを持っている相手ってのは、それほど脅威じゃありません。武器を持っている手だけ気を付ければいいので」
幸平「ち、仕方ない。ここは一旦」

逃げようとする幸平にローキックを脚に喰らわせ、ナイフを蹴り飛ばす
仁。続いてアキレス腱を痛める締め技。

幸平「いだだだたたた！！」
仁「痛い技なんだ、当たり前だろ！それと、

もう逃げるのは諦めな。もう失敗尽くしだ」
幸平「なに！？」
仁「①、殺し作業は短時間で終わらせた方がいいのに、こうして妨害されてる。②、それにより時間掛かり過ぎ。③、俺と琴子先生に顔を見られた。後で警察に似顔絵書かれたら指名手配される」
琴子「私、人の顔覚えるの苦手だよ？」
仁「そんな事もあろうかと事前に写真撮っておきました！？」
琴子「準備がいいねえ」
仁「だから、殺し屋どころか、人生詰んだわけよ、あんた」
幸平「クソ……」
仁「琴子先生、早く警察を呼んで下さい」
琴子「あ～それなんだけど、私から提案があるけど、いいかな？」
仁「……嫌な予感しかしませんがどうぞ」
琴子「その人を、私の小説のアドバイザー兼家政婦として雇ってもいいかな？」

仁「嫌な予感的中――！！？本気ですか？！」
琴子「だって本物の殺し屋だよ？最高のアドバイスを貰えるじゃないか！それに……私は普段、家事とか全然だから、丁度家政婦を雇おうかと思ってたんだよ」
仁「殺されたらどうするんです？」
琴子「出版社に顔写真と「私が音信不通になったら、この人に殺されました」的な話を通しておくから。ね、どうだい？」
仁「（幸平に）だとよ、どうする？」
幸平「殺しの仕事がダメになると稼ぎが……！（苦渋に）仕方ない、わかった。引き受ける」
琴子「やた！」

跳ねて喜ぶ琴子。
やれやれ、と天を仰ぎ見る仁、幸平。

○数日後・同・昼
仁の店に琴子、幸平が来店。

琴子「よかった〜。まだここで営業していたんだね！」
仁「いらっしゃい。ま、ここでの商売も今日までですよ。そろそろ次の場所に行こうかと」
琴子「ギリギリセーフだね」
仁「……それで最近はどうですか？お互い」
琴子「快適だよ！部屋が綺麗になったお陰でベッドで眠れるし、料理も作って貰えるから毎日買い物に行かなくて済む！いい事尽くしだね！小説のネタのアドバイスも有難いねえ」
幸平「……部屋、カオスだった。料理スキル……何か身に付いた。……眼精疲労半端ない」
仁「あんたの方が大変そうですねえ。過労死にはお気をつけて」
幸平「殺し屋殺しの作家だよ……」
琴子「労いのブレンドを頼むよ」

仁「あなたが言いますかい。少々お待ちを」

慣れた手つきでこひーを淹れる仁。

琴子「ところで、旅に出るという事は、今回「夢」は見付けられなかったのかい？」

仁「探すどころじゃありませんでしたからね」

仁・幸平「やれやれ……」

空を仰ぎ見る仁、幸平。

仁M「俺の旅は続く。今度はそうだな……平和な町にでも行こうかな」

２話　完